

研究ノート

重山文庫所蔵伊藤圭介宛シーボルト書翰について

吉野 政治

表象文化学部・日本語日本文学科

1

尾張の本草学者・伊藤圭介（1803-1901）の『泰西本草名疏』（文政十二（1829）年刊）は近代植物学の創始となったリンネ（Carl von Linne 1707-1778）の雌雄蕊に基づく植物分類法二十四綱法を我が国に紹介した最初の書物として知られている（ちなみに「雄薬」^{おしべ}「雌薬」^{めしべ}「花粉」などは伊藤圭介の造語とされる）。この本はツェンベルク（Carl Peter Thunberg 1743-1828）の『日本植物志』（『Flora Japonica』1784）の抄訳であるが、彼はこの本をシーボルト（Philipp Franz Balthasar von Siebold 1796-1866）から譲り受けている。

二人の最初の出会いは、1826年3月29日（文政九年二月二十一日）、シーボルトの一度目の来日の際、長崎から江戸へ向かう途中の尾張熱田の宮の宿（現在の名古屋市熱田区内）においてであった。シーボルトの『江戸参府紀行』の中にその時のことが次のように書かれている（東洋文庫本の斎藤信訳による）。

日本の友人や以前の門人が訪ねて来たが、その中にはたいへん経験の豊かな植物学者で、私が出島から手紙のやりとりをしていた水谷助六（Mizutani Zukuroku）と、医学には門外漢で私が前に植物の収集を依

頼しておいた同覚（Tōkaku）がいた。ここでは私は後日私の研究にたいそう役だった伊藤圭介（Ito Keiske）と大河内存真（Okutsi Sonsin）と知り合いになった。

水谷助六（豊文）は圭介の植物学（正確には本草学）の師であり、存真は兄であるが、この三人は江戸からの帰路のシーボルトを、5月27日（四月二十一日）に再び宮の宿で出迎えている。この時、圭介はシーボルトから長崎への遊学を勧められ、翌年長崎のシーボルトのもとで半年間植物学を学ぶことになる。ツェンベルクの『日本植物志』は圭介の帰郷に際し、餞別として贈られたものであった。時に、シーボルト31歳、圭介24歳。

1828年（文政十一年）、シーボルトは国禁の地図などを国外に持ち出そうとした罪などで出島に幽閉され、翌年国外退去となるが、1858年（安政五年）の日蘭修好通商条約の成立によって彼に対する追放令が解かれ、翌1859年（安政六年）に再び来航し、幕府の外事顧問となった。その役を解かれたシーボルトは1861年11月17日（文久元年十月十五日）江戸を退去し長崎に向かったが、その途次、横浜滞在中の12月11日（十一月十日）と12日（十一日）の両日に、圭介との三十四年ぶりの再会を果たす。時に、シーボルト65歳、圭介58歳。12月11日のシーボルトの日記には次のようにのみ見える（石井禎一・牧幸一訳『シーボルト日記 再来日時の幕末見聞記』八坂書房）。

私の旧友で、現在の本草学の第一人者である伊藤圭介が来訪。

その面会の時の詳しい記録が同席した圭介の門人田中芳男（東陽）によって稿本の形で残されているが（『横浜雑記』）、その稿本と覚しき田中芳男自筆の紙数六葉が昭和二十八年に市立名古屋図書館において催された伊藤圭介展覧会に名古屋の菊池立元氏から出陳されたのを機に、吉川芳秋氏によって活字化されている（『尾張郷土文化医科学史攷拾遺』同刊行会、1955年11月刊）。本稿で紹介しようとするシーボルトの書翰の内容を理解するのに参考となるので、その一部を次に引用する（ただし、『医学・洋学・本草学者の研究 吉川芳秋著作集』八坂書房1993年10月刊による〔pp115-118〕。必要に応じて注と振仮名を付し、二行細書きの部分は〈…〉内に記す）。

…シーボルトニ会面致候処、大悦ノ様子ニ相見エ候、通詞ヲ以テ応対致候、シ（シーボルトのことー引用者注）「久々ニテ御目掛り甚タ大慶致候、再会ハ拙モ不相叶候ト存候処、不計事ニテ候、御壯健目出度候、イ（伊藤圭介のことー引用者注）「御同意ニ存候、此度江戸表エ罷越処面会ノ為メ此表エ罷越候、先年長崎帰帆後是怎样致サレ候哉、シ「先年別後ハ欧羅巴諸国不残遊歴致シ候、リュスニモ居申候、伊斯巴尼亞ト波爾杜瓦爾計ハマイリ不申候、イ「米利堅ハ如何、シ「是モ參不申候、イ「拙者当年五十九歳ニ相成候処、ミ子ール年齢如何、シ「六十五歳ニ相成候、〈白髮「イ」ニ同シ、鬚髯モ長クメ雪白也、併シ至極壯健ノ躰ニ見ユ〉

一、腊葉金石等見セ鑒定ノ名ヲ乞候処、シ「金石類ノ鑒定甚六ケ敷候、容易ニ名難記候、イ「此方ニテ草木ハ図等モ有之、花ノ解体規則モ有之候得者相分リ易候得共、金石ハ図ニテモ不相分鑒定六ケ敷候故尋度候、…（中略）…、シ「腊葉多分ニ候処、手前

長崎エ持參致鑒定致シ候テハ如何、イ「右ハ一応江戸表エ持帰り相談之上ニテ長崎エ腊葉可相廻候、シ「長崎エ腊葉相廻サレ候ハ、鑒定致シ名相記候様可イタス候、其節ニ長崎ニ所持致居候金石類少々宛配分差上可申候、イ「追々著述出来申候哉、シ「出来致候〈トテ大本ノ蘭書四冊持出シ相見セ候、一冊ハ漁類一冊ハ鳥類一冊ハ蟹蝦ノ類一冊ハ木ノ類皆々日本ノ産物ニテ彩色ノ図甚美ニメ目ヲ驚ス程ナリ、右図ハ長崎画工豊助蘭人デヒルノ子ウエト云画工写真致候由〉

シ「草木ハ四冊ホド有之候、総テ十冊余ニテ不残長崎エハ持參致候得共、此表エハ此冊ノ外ハ持越不申候、此書物不残仏蘭西語ニテ記申候、蘭語ハ狭クメ普通ニ非ズ、仏語ハ西洋諸国広ク相行ハレ候故此語ヲ相用ヒ候、此書物ハ和蘭王ヨリ日本大君エ献上仕候品々候、此外蛇之本モ有之候、其外書籍類多分ニ長崎迄持參致居候、長崎ハ当時鳴瀧ニ寓居イタシ候彼表エ出候得者大ニ宜事ニ候、且亦貴君ノ名ハ追々本草書中エ載置申候〈本草書出シ見セ ITŌKI ノ符有之ヲ見セル虎刺ノ下ニモ出テ其外多分有之ヲ見セ申ソロ〉此如歐羅巴ニ貴名相顕シ居申候、此書ハ私門人ノ仏蘭西人ノ著述ニ候〈右ハ先年長崎エ遊学ノトキシシーボルトエ草木ノ名多分教置故也〉シ「今日ハ真ニ喜コハ敷日ニ候、不図貴君ノ来訪ヲ得又忝アレキサンデル英国ノオツヒシールニ役附致候、イ「目出度候、明日又參リ可申候、シ「今夕ハ忝役附ニ付英ノミニストルエ相招カレ候、明日ハ何時ヨリニテモ御出可被成候、

同十二日シーボルト旅宿エ罷越ス、…（中略）…

一、蘭人一人シーボルトエ談ニ来シーボルト申聞候ニハ是ハ伊藤圭介ト云人ニテ本草書中ニモ追々名前出候ト云ヒ書物ヲ出シ見セ候、此人曰左候ハ、圭介ノ像ヲ写真致候テハ如何、シーボルト至極ノコトト申対候

様子ニ候、シ「貴君之像写シ置タク候、幸ニ英国ノ画工参居候、呼ニ遣シ頼ミ可申候、程ナク画工来レリ、圭介椅子ニ掛リ脇差ヲ帯居刀ハ傍ニ有之候処、右蘭人刀ヲ執リ帯刀ノ態亘様申候、蘭人云一処ヲ見不動様ニ可被成ト云、石筆ニテ写シ取ル、名ハWirgmanト申候由、右名前記シ呉候〈写真図、此方エモ一枚贈リ呉ル様通詞エ頼ミ置〉…(下略)…

于時文久元年酉十一月也

信州 飯田田中東陽 誌

ちなみに引用の13、14行目に圭介は「当年五十九歳」、シーボルトは「六十五歳」とあるが、圭介は数え歳で言い、シーボルトは満年齢で答えているようである。

この再会の後に、シーボルトが伊藤圭介に送った書翰がある。オランダ語(蘭文)で書かれたその原本は現存しないようであるが、その写しが京都の新村出記念財団の重山文庫にある。また、吉川芳秋氏前掲書によると、名古屋の菊池立元氏の許にもある由である。そのオランダ語を日本語に翻訳(和解)したものの写しが三つ確認できる。

一つは、シーボルトとの再会の時に同席した田中芳男が筆写したものであり、シーボルトの原文の写しとともに菊池立伯氏に贈られ、その子孫の菊池立元氏に伝わったものである(吉川前掲書 p119)。後に全文を示すが、仮名は片仮名を用いている。

あとの二つは重山文庫にある。二つともに仮名は平仮名である。ともに和紙に毛筆で書かれ、一つは縦24cm・横32cmの紙三枚を一枚ずつ二つ折りして重ね、もう一つは縦21.5cm・横27cmの紙三枚を二つ折りすることなくそのままに、紙縫こよりで綴じられている。前者はより楷書体に近い丁寧な字で書かれており、後者はより草書化した字で書かれている。

2

次に、菊池立伯氏に送られた田中芳男筆写の

全文を吉川芳秋の著書から引用する(後の説明の便宜のため行数を付す)。

- 1 シーボルト書翰翻訳
上ハ
方今江戸ニ在ル
予カ旧門人伊藤圭介^{ママ}
- 5 絵像式枚ヲ添フ
紀元一千八百六十二年第一月十一日
横浜愛敬スヘキ旧門人
予此書翰ニ添ヘテ並ニ足下ノ絵像ヲ送ル、
此絵ハ英国ノ良画工画ケル所ノモノナリ、
10 且乾草木ヲ十分ニ採集^{シテ}ノ其名号産所トヲ記
タルモノヲ予ニ送ランコトヲ懇望ス、然ハ
予別ニ其名号薬用方効能ヲ小紙ニ記シ足下
ニ送ラン、且又其代ニ諸般ノ鉱金及ヒ緊要
ノ石類ヲ拾集シタルモノニ其名号ヲ誌シテ
15 之ヲ足下ニ送ラン、是レハ日本ニ於テ要用
トナルベク予モ亦タ足下送ル所ノ諸草木ヲ
以テ諸般ノ珍種ヲ会得スルニ至ルベシ、依
テ今ヨリ速ニ其コトニ取掛リ長崎奉行台下
ノ寛怒ヲ請ヒ、又ハ予カ男子「アレキサン
20 ドル」ニ話シ、英国ノ便舶ヲ以テ諸種ノ草
木ヲ予ニ送ランコトヲ配慮アランコトヲ請
フ、足下常^{ママ}ニ記念アレカシ
フオンシーボルト
予又乾草木ノ代品トシテ肝要ノ書類ヲ足下
25 ニ送ルベシ、故ニ足下速ニ許多ノ草木ヲ予
ニ恵送アレカシ、「ミスケロク」ノ草木
ヲ亡失ナシタマフナ 諸草木ニ
(相成ヘクハ) 其花又ハ果実一二種ツ、添
ヘ毎草木ヲ紙一枚ニ包ミ和漢ノ名ヲ施シ其
産地ノ名ヲ書シテ予ニ送り、且是ニ其目録
30 ヲ添ヘ加フルトキハ幸甚ナルベシ、然ルト
キハ予其目録ニハ足下送ル所ノ乾草木ハ予
ガ許ニ留置キ(曾テ予ガ為セシ如ク) 予ガ
書中ニ載スル毎ニ伊藤圭介ヨリ得タルモノ
ト書記スベシ、未ダ説明ナラザル「ファー
35 レンコロイト」^{蕨ノ類カ}ノ諸種ヲ送ルコトヲ忘
ルベカラズ、足下予ノ蜂(ハチノロイ^{蜂ノ類カ})
其他ノ虫ヲ小筒ニ入レ送ラハ是ヲ予シテ甚
樂ナラシムル所ナリ

足下ノ老師 フォンシーボルト
40 右堀 達之助和解 仰付翻訳出来
戊正月

翻訳（和解）者は最後に見える堀達之助である。彼は日本初の英和辞書である『英和対訳袖珍辞書』（文久二（1862）年）の編纂者であり、当時蕃書調所（洋学研究教育機関、東京大学の前身）の翻訳方であった。後に紹介する重山文庫所蔵のものではこの部分は「右ハ蕃書調所堀達之助蒙命和解出来之由」となっており、その後の「戊正月」はない。

1行目および2行目（重山文庫所蔵のものには「上ハ書」とある）は堀達之助の説明であり、3行目から6行目の日付と発信地の「横浜」までがシーボルトの書翰の上書き部分である。「愛敬スヘキ旧門人」は本文の書き出しであろう。右の引用では発信地である「横浜」に続けて書かれているが、重山文庫所蔵のシーボルトの原文、また「和解」の二つの写しでは行を変えて書かれている。

本文の内容から二通の書翰であることが分かるが、一通目が書かれたのは、6行目に書かれている1862年（文久二年）1月11日である。堀達之助の翻訳が完成した「戊正月」は同年の正月であろうから、二通目も時を置かず書かれたことになる。

3

さて、重山文庫にある二つの写しは、新村出博士の字で「伊藤圭介先生ニ関する文書 二通」等と書かれた大正4年7月15日付の「大阪時事新報」に包まれた封筒の中に『泰西本草名疏』の稿本の一部とともに入れられており、その封筒の裏に「シーボルトより伊藤圭介翁へ送りシ蘭文書状ヲ蕃書調所在勤ノ堀達之助和解シタルモノヲ寫シタルモノト云」と書かれているが、吉川芳秋氏前掲書には「圭介翁自写のものが、京都新村出博士の許にあり」とある。そこで、調べてみたいのは、これらの写しが本当に吉川氏の言うように「圭介翁自写のもの」か

ということである。そして、それは重山文庫所蔵二通のうちのいずれか一通のみなのか、それとも二通ともにそうなのかということであり、後者とすれば何故二通存在するのかということである。

今、この重山文庫所蔵の二つの写しのうち、より丁寧な字で書かれているものを、先に掲げた田中芳男筆写のものと比較すると、「産所」と「産地」がともに「出所」とあり、「紙一枚」が「紙一葉」とあり、「虫」が「昆」に、「ファーレンコロイト」が「ファレンコロイト」になっているなど、訳語や表記の仕方にいくつかの違いが見られるが、書写者を特定する上で注目されるのが、次の相違である。

a 26行目の「[ミスケロク]ノ草木ヲ亡失ナシタマフナ」が「[スケロク] 助六君よりの草木を亡失するなかれ」となっていること。

b 文中の全ての「足下」が「汝」になっていること。

aの「ミスケロク」はシーボルトの原文には「m.Zukerok」とある。おそらくは『江戸参府紀行』に「Mizutani Zukeruku」とある水谷助六（豊文）のことであり、「ミ」は姓の頭文字であると考えられる。水谷助六は伊藤圭介の本草学の師であり、「ミスケロク」を「助六」と判断し、敬称の「君」を添えているのは、この写しが「圭介翁自写のもの」である可能性が高いこと示す。

一枚目（全三枚）の紙の右端下に小字で「按汝ヲ足下トカユ」と書かれており、「汝」とあるべきところを堀達之助の訳では「足下」と変えているという意味だと思われるが、bは、このことと関係するものであろう。シーボルトの原文では二人称代名詞は「UE」が使われているが、同じく二人称代名詞の親愛を籠めたjeに対して、「UE」はより丁寧な形の語である。青木昆陽『和蘭話訳』には「ユ（U・引用者注）ハ其元ナリ。ユー（UE・同前）ト書ハ懇懃ナル其元ナリ」とあり、『和蘭字彙』（1855年刊）では「尊公様」と訳されている。また、

「足下」は『日葡辞書』（1603年刊）に「手紙の上書きに、謙遜し、相手の人を尊敬して書く語」と説明されているが、文中に用いられていても、その敬意度は同じである。したがって、シーボルトが「UE」を用いているのは、圭介は「旧門人」ではあるが、一人前の植物学者として遇したということであろう（シーボルト再来日の日記には「私の旧友で、現在の本草学の第一人者である伊藤圭介」とあった。この年、圭介は蕃書調所の物産教授として出役を命じられており、前掲田中芳男による再会時の記録に「此度江戸表工罷越処」とあるのはそのことを言っているものと思われる）。したがって、堀達之助の「足下」はそれを正しく訳したことになるが、それを「汝」に直した者はそれに違和感を覚えたのであろう。その違和感が何であったかを推測するのに参考になるのが、aの「亡失ナシタマフナ」が「亡失するなかれ」になっていることである。ここには敬意は含まれず、注意を促す者の上から下への言葉遣いである。この言い換えに三十四年後の今なおシーボルトを師として仰ぐ圭介の思いを読み取るのは妥当であろう。再会時の田中芳男の記録に「ミ子ール」（13行目）とあるのは、minnaarで、英語の dear に相当する語であろうか。

以上を要するに、この写しは吉川芳秋氏の言うとおりに「圭介翁自写のもの」と考えてよいようである。上述の内容からだけの判断では、あるいはそれを別人が写したものである可能性もあるが、この写しの文字はこの写しとともに同封されている『泰西本草名疏』の稿本の文字と似ており、そのことから「圭介翁自写のもの」と見てよいであろう。また、前述のように和解の最初の一枚の右下端に「カユ」とあったが、『泰西本草名疏』の稿本にも「用ユ」を「用フ」と朱で直した箇所がある。共にハ行をヤ行に活用させる形の動詞を日常語として用いていた人物であることが推測できるが、これも二つの書き物の書き手が同一人物と考える材料になろうか。

4

重山文庫にあるもうひとつの写しは、堀達之助の和解を補訂したものを改めて書き写したもののようと思われるが、それはかなりの歳月が経った後になされたもののようで、前述のように同一人の手になるとは思われないほどの達筆な草書で書かれている。この写しにも二カ所ほど誤写し、それを書き直したところも見られるが、内容は先のものと同様である。ただ、最後の「右ハ蕃書調所堀達之助蒙命和解出来之由」という説明の部分は省かれており、本文にも先のものにさらにいくつかの訂正が加えられている。例えば「昆」が「昆虫」となっているのがその一例である。すなわち堀達之助の和解では「虫」とあったものを、伊藤圭介は先には「昆」に変え、この写しではさらに「昆虫」と変えたわけである。原文は「insekten」で複数形。「昆」もまた虫の意味であるが多いという意味もあり、「昆虫」は虫類の総称であるので、圭介は意識的にこの字また語を当てたものと思われる。

先の和解の写しが手元に在るにもかかわらず、改めて和解の写しを行った理由を知るのに注目されることがある。それは、先の和解の本文冒頭は「予此書翰に添へて並びに汝の絵像を送る」であったが、この和解では新たに「並びに」の前に「予」が挿入されていることである。シーボルトの原文は「portrait van mijen van UE」（私と貴方の肖像画）であり、この訳の方が正しい訳になっているわけである。上書きには「van mijnen ouden Leering Itokeiske met twee Porteten」（私の古い生徒伊藤圭介へ二つの肖像とともに）とあったが、これだけでは誰を描いた肖像なのかが分からないが、この正確な和解によって、圭介とシーボルトの肖像画が送られて来たことを知ることができる。圭介の肖像画は、再会時の田中芳男の記録の最後の段落に見える Wirgman という「英国ノ画工」によって描かれたものが約束どおりに送られてきたのであろうが、併せてシーボルト自身

の肖像画も送られていたわけである。ちなみに Wirgman (Charles Wirgman) は幕末から明治初めに日本に在留していた「イラストレーター・ロンドンニュース絵入倫敦新聞」の画家であり、慶応三年に英国大使を徳川慶喜が大阪城中において引見したときに通訳をしていたアーネスト・サトウ (Ereest Mason Satow) の姿も描き留めている人物である (新村出「薩道先生景仰録」参照)。

ところで、この「予」を挿入した正確な訳がなされていることで、この写しはシーボルトの原文を直接見ながら行われたものであることが推測される。おそらく先の写しを行ったのち、圭介はシーボルトの書翰の原文を見る機会を得 (その写しが重山文庫にあるものであろう)、それによってみずから和解を試みたのであろう。それゆえに「右ハ蕃書調所堀達之助蒙命和解出来之由」という説明は省かれたものと思われる。したがって、この写しは圭介自身の新しい和解と言う方が良い。

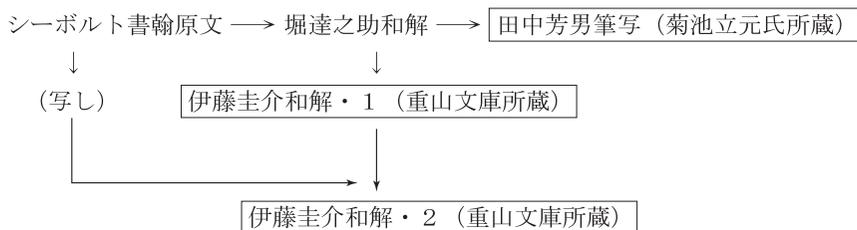
この新たな和解はシーボルトの原文の写しと同時に行われたことがシーボルトの原文の写し方から推測される。すなわち、シーボルトの原文の上書きと一通目の最初から四分の三ほどま

では一枚の大型の紙 (縦 21.5cm、横 54cm) を左右に区画して書かれ、終わり四分の一は二通の書翰の和解を書き終えた紙 (縦 21.5cm、横 27cm) の余白に書かれているからである (すなわち新しい和解に用いられている紙はシーボルトの原文の上書きと一通目の四分の三ほどが書かれている紙を半分に分けて用いたものである)。原文の二通目は和解と同じ大きさの紙二枚に書かれている。

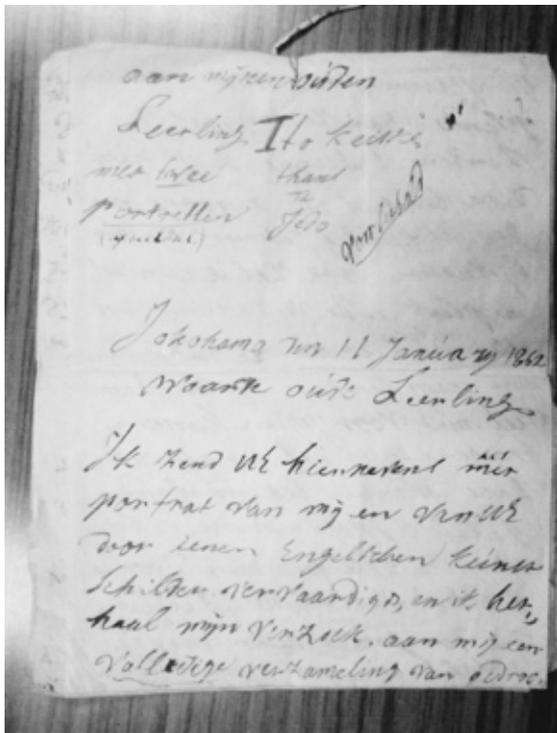
ところで、書翰原文の二通めの写しの二枚目の裏に「八十翁書」と読める部分がある三十五、六字の短文 (判読不能部分があるが、俳句らしきものを含む) が書かれている。これがシーボルトの原文とその新たな和解を書き終えた後に圭介自身が書いたものであれば、原文の写しと圭介自身の和解がなされたのは圭介八十歳の時ということになる。時に明治十五年 (1882) である。

5

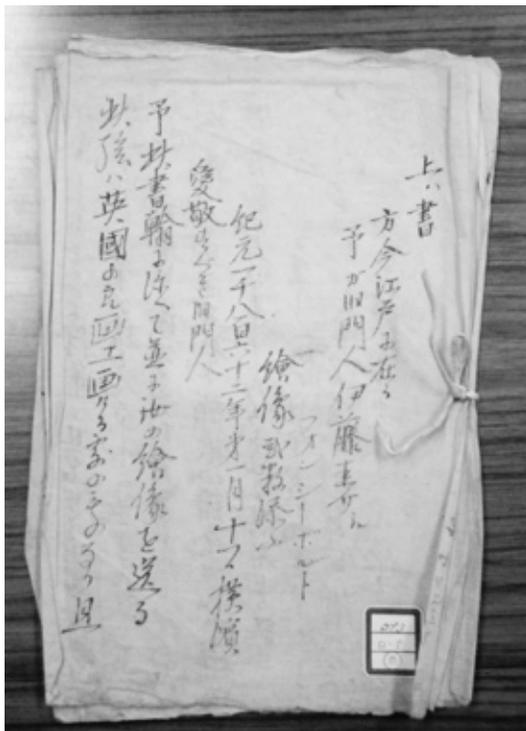
本稿で推定した三つの和解の関係を図示すれば次のようになる。



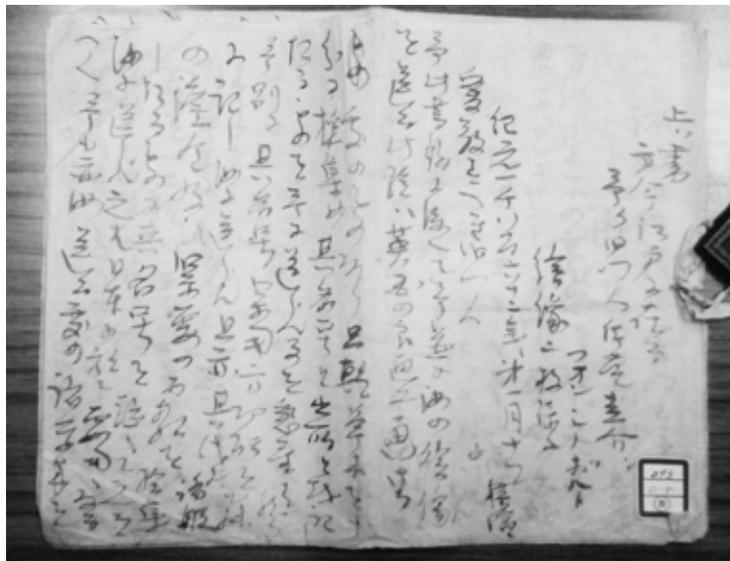
(新村出記念財団使用許可済。2009.2.11 稿)
(よしの・まさはる 本学教授・新村出記念財団評議員)



新村出記念財団重山文庫所蔵シーボルト書翰写



重山文庫所蔵シーボルト書翰和解・1



重山文庫所蔵シーボルト書翰和解・2